

浄土

monthly
JŌDO

9

September 2006



念仏を修して浄土をもとむる者は、
釈迦弥陀のおん心にあいかなえり。

雑行を修して浄土をもとむる者は、
釈迦弥陀のおん心にそむけり。

群馬・太田

大光院

寺に歴史あり

人々に信仰あり

日本の

心の故郷を紀行する

寺
院
紀
行



義重山大光院新田寺は子育て呑龍さまのお寺として知られる。写真は呑龍上人像を安置する開山堂とその内陣。昭和九年に落成した十三間四面の堂々たる大伽藍は全国初のコンクリート造りの寺院だ



本堂は山門の正面にあり、山門から
向って本堂の右手に吞龍堂、左手に
は吞龍上人お手植えの臥龍の松があ
る。本尊は快慶作の阿弥陀如来立像。
また脇壇には新田義重公、徳川家康
公、秀忠公、家光公の像や出開帳用
の吞龍上人像が奉られている



本堂と臥龍の松

出開帳用の吞龍上人像。厨子の中の上人にかぶせる水冠（写真下のかぶりもの）はきちんと収まるように後ろが短くなっている。今回の取材のために特別に開帳していただいた



参道のお土産物屋さんには子育て祈願にくる家族にむけた虫切太鼓や呑龍まんじゅうなど特産、名産品が並ぶ



親孝行の息子をかぐまい寺を出た呑龍上人は長野の小諸の草庵に五年もの間、身をかくしていた。その孝行息子の源次兵衛の墓が鶴の墓と共に境内の裏山にある



大光院第六十九世鈴木靈孝貫主。浅草の行安寺の住職も兼務している。浄土宗の宗議会議員や東京事務所長などの要職をいくつも務めてこられてきた

吞龍上人の絵解き。吞龍堂の脇陣に飾ってある。三十枚の絵に上人の生涯が描かれている

境内にある大光院幼稚園。子育て吞龍さまのお寺には、いまも子供が集まっている



浄土

2006/9月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 群馬・太田 大光院.....	タカオカ邦彦	1
法然上人の再来を求めて①	上田紀行	7
仏教コラム	大室了皓	13
法華経のはなし	真野龍海	14
寺院紀行 群馬・太田 大光院	真山 剛	20
表紙の言葉.....		29
会いたい人 五十嵐喜芳さん②	関 容子	30
響流十方	林田康順	38
シネマ随想	袖山榮真	42
Jフォーラム		47
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	51
編集後記.....		52



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会

主催講演会

日本仏教の
再生は可能か

法然上人
の再来を求めて

I

上田紀行

きょうのお話はこういうふうにしようかと思ったのですが、前半は「生きる意味」（岩波新書）のお話、後半は「がんばれ仏教！」（NHKブックス）のお話をしたいと思います。といいますのも、私は日本仏教が死にそうになっているのは、「現代の苦しみというもの何なのか、ということ突き詰めていない」という、この一点に尽きるのではないかと思っています。

我々現代人が何に苦しんでいるのか。仏教というのはお釈迦様以来、苦しみというものにいかに向かい合うかという教えだと思っています。

お釈迦様も、その時代の苦しみというものを見て、発想なさったわけです。そして、まさにその後、大乘仏教が出てきたのもそういうことであつた。それが、南伝し、北伝し、そして日本に入ってきた。聖徳太子がそれをお迎えになったのも、その時代の日本に仏教が必要だと考えられたからだだと思います。

最澄、空海はとてつもなく現代人です。私は、仏教人というのは、とてつもない現代人で、時代の前衛を生きる人だつたと思っています。聖徳太子は、その時代の日本をつくり上げた人です。まさに新しい日本像というものを提出していった人です。その中で、仏教を生かされました。

そして、空海というのは、まさに芸術的な面でも、あるいは建築であつたり土木であつたりする意味でも、その時代の知性の先端です。しかしながら、その仏教が、国家を護持するということになって、比叡山に入ってしまう。そして、兵力を持ったり、政治権力とというようなものにズブズブになってしまう。

そのとき、まさにスターとしてあらわれてきた人がいる。「この仏教では人々が救えな

い。この日本が救えない。ある一部のエリートだけを救うものでいいのか」といつて比叡山を下りて来られたのが法然上人です。そして、その法然上人の導きに從つて、親鸞という人が生まれ、そして、鎌倉仏教の道元、日蓮といったような、今の日本仏教を支えているような仏教のスターが、綺羅星のごとくあらわれてくるわけです。

時代の苦しみとは

まさに、この時代に向き合い、「この時代の苦しみというのは一体何なのか」ということに向かい合つた結果が、今の日本仏教を支えているのだと思います。もし、仏教というものが、古い時代のある尊い教えをただ伝承するだけでいいのであれば、日本仏教が生まれる必要はありませんでした。それは仏陀の言うことを繰り返して言えばいいわけです。

もちろん、お釈迦様というのは、今でも仏教の根幹でありますし、大変すばらしいことをおっしゃっています。しかし、それがいろいろな国、チベットではチベットのよう、日本では日本のように、そして南伝した上座部仏教のほうでは、その国に根づいて発達してくる。

それはまさに、その風土の中で、そしてその時代の中での衆生の苦しみというものにかに向かい合うかという、その一点で仏教というのは命脈を保ってきたことの証しと思われまゝです。ですから、古い教えをただ伝えればいいということであれば、空海も聖徳太子も、そして法然上人も必要なかったというわけです。

宗教というのは、我々民衆の中に生きています。そうであれば、そうした祖師の

言葉を歪みなく伝えるという努力とともに、現代のこの苦しみというものの中に、偉大な先生方、先達たちの教えがいかに生きるのかという、そのことを考えていく方がたくさん出なければいけません。

しかし、私は仏教と日本仏教を考えると、「現代に向かい合う」という部分が欠けているのではないかという感じがいたします。私の「生きる意味」というのは、現代の日本がどのように苦しんでいるのかというのを、まず明らかにしたかったわけです。

日本はこんなに豊かなのに、なぜこんなに若者たちや中高年たちに、「私たちの生きる意味」というものがわからない」という方が多いのでしょうか。

自殺なさる方が三万人以上います。これが七年間続いております。一人の自殺者の向こう側には、二人自殺未遂をするという方がいると言われているから、年間十万人の方が自殺を企図され、三万人の方が自殺で亡くなっています。そうすると、七年間で、七十万の方が自殺を企図され、二十万人以上の方が亡くなってしまったということになります。

その理由に、「生活苦」というものがふえております。この日本で「生活苦」というのは、私のような文化人類学者からすればあり得ないことです。今、世界では、一日に四万人の子供たちが、貧困が原因で亡くなっています。それは本当に「苦」でしょう。

しかしながら、日本では、田舎のほうだったら一軒に車が二台も三台もあつたりしますし、テレビが二台も三台もあつたりします。パソコンもあつて、電話をかければ、家のお風呂に着火できたりもします。

戦後の日本というのは、本当に物理的な苦勞、飢えたりとか、お金がないという苦勞に

については、もうほとんど克服してきました。いつも右肩が上がっていつて、どんどん豊かになるということに生きる意味をつくっていったわけです。

そして、その時代は、ほかの人と一緒にの事をやっていけばよかったのです。先生が言うことをやっていけばよかった。「いい大学に入ればいいんだよ」、「いい高校に行けば幸せになるんだ」ということを聞いていたら幸せになったのです。

だから、みんなと同じものを欲しがっていたわけです。隣に冷蔵庫が来たといえ、うちもかな。隣にクーラーが来たといえ、クーラーかな、と。

つまり、私が「生きる意味」の中で言っているのは、生きる意味が既製服であった時代、みんな仕立てのいい既製服を着られるようになってきた。しかしながら、それではもう満足できないというか、もうそういう時代は終わったのです。我々がどんなに豊かになっても、そこに「苦」を感じてしまうという、その「苦」は私たちの魂の苦しみだということがわかりました。私が何のために生きているのか、私自身は何なのかということを考えなければいけない時代になったということを、私は提言しています。

「私」というものの価値

この「生きる意味」の中で私が書かせていただいたのは、現代の私たちの苦悩は、「私がどこまでも交換可能なように思えてしまうこと」です。「別に私じゃなくなってもいい」、「私の代わりなんて幾らでもいるよ」という感じです。

日本社会は「いい子」で育てられています。みんなから褒められる子がいい子。迷惑をかけないのいい子。だから、みんなから期待されて、大体こういうような個性がなくて、

余り面倒くさいことを言わない子、個性をどんどんすり減らしていく。ですが、そういう「いい子」は、「いい子だね」ってみんなから褒められますが、あるとき、「でも私はどこにいるんだろう」と思います。なぜなら、他の「いい子」と交換可能だからです。

交換可能の反対語は何でしょうか。それは「かけがえがない」という言葉で私たちは呼んでいたように思います。「かけがえがない」というのは、まさに「交換不可能」です。

「お母さんは、僕のかけがえのなさというのを見てくれているのかな。お母さんは、結局、〇〇高校に行って、〇〇大学に行っている、世間体のいい僕というのを愛しているだけなんじゃないですか」と思うわけです。そういうのは、心理学のほうでは、「条件付きの私」とか「条件付きの愛」と言います。

その反対語が、「無条件の愛」、あるいは「あるがままの私を愛してくれる」ということです。私は、日本社会というのは、高度成長経済を繰り返していたときに、どこかで本当に「あるがままの私」、「条件がついていない私」というのも愛されているんだというところを落としてきたように思います。「業績をちゃんと達成するあなた」、あるいは「世間体のいいあなた」、「世間体のいい私」それを愛している。

しかし、それはまさに「条件付きの私」です。本当の無条件の意味で、「命として生きる私」というものが見失われて、会社の名前であるとか、点数が何点であるとか、そういった条件のあなたが愛されているんだというところまで、人間の深さというものが薄っぺらになってしまったのではないか。そのようなことを、私は「生きる意味」で述べています。

では、そこからどういうふうに確立したらいいのか。「既製のあなた」、「いい仕立て

の服を着ているあなた」だから愛されるのではなくて、これを全部脱ぎ捨てた私が愛され、その「私」というものの価値に気がついていくというような時代にならなければ、どんなに豊かになろうが、この日本の中では無理なのではないかと思われます。

まさに、オーダーメイドの生きる意味というのはどこから出てくるのであろうかと考えたときに、二十一世紀の一番強い人間像は、私は「釣りバカ日誌」のハマちゃんだと宣言しています。釣りさえやっていれば楽しい、ということです。これはオーダーメイドです。

もう一つは苦悩することです。我々が苦悩するときというのは、本当に私が何かをやりたいということと、現実に行っていることが異なるときです。だから、まさに苦悩というものを大切にしなければならぬのではないかということを、提言させていただいているわけです。そして、その苦悩というものから発するというのは、まさに仏教の根本にある教えなのではないかということです。

(つづく)

上田紀行（うえだ のりゆき）

1958年東京生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。専攻は文化人類学。現在、東京工業大学大学院助教授（社会理工学研究科・価値システム専攻）。著書に『生きる意味』（岩波新書）、『がんばれ仏教』（NHKブックス）、『癒しの時代をひらく』（法蔵館）、『宗教クライシス』（岩波書店）、『スリランカの悪魔祓い』（徳間書店）、『覚醒のネットワーク』（カタツムリ社）など。町田宗鳳と共著『生きる力としての仏教』（PHP新書）

交通事故で亡くなる人よりも、自ら命を絶つ人の方が圧倒的に多い。一日当たり百人程にもなるという。

子供もなく、頼りになる親戚もなく、認知症の老妻の長年にわたる介護に身も心もボロボロに疲れ果て、妻の首を締め、自らもその後を追った事件があったが、他になすすべはなかったのかと考え込むばかりで、そのご当人の心情にただただ涙を流すばかりであった。

このような悲劇はまれであるけれども、仕事に、お金の工面に、人間関係のもつれに、生きる希望をなくして、命を絶つ人達が少なくない。それも中高年に多いと聞く。人生の辛酸をなめ尽くした果てのやむを得ない決断であろうが、悲しい事である。

法然上人は説いておられる。

仏を信じて念仏する人は、阿弥陀仏をはじめ十方の無数の仏や菩薩がこの人を囲み、夜も昼も影の形に添う様に寄り添い、幸せな日々を送れるようにと守って下さっている、と。(浄土宗略抄)

私も時に落ち込む事があると、その度にこの言葉を思い出しては、

「無数の仏や菩薩が私を案じ守っておられる。その慈悲を無駄にしてはならない、それに応えねばならない。仏・菩薩を悲しませてはならない、私に対する大慈悲を裏切ってはならない」と自分に言い聞かせて、落ち込む心を奮い立たせてきた。今までの長い人生には様々の禍があったが、この教えに励まされ念仏を唱えつつ八十年を生き抜くことが出来た。

『法華経』のはなし 入院の友・《法華経》「方便品」

真野龍海

我が脚に長年の酷使の疲れが来たのか、股関節の所が具合が悪くなって、昨秋、思い切って手術入院ということになりました。ある医師はお年だから、成功率半々だと言われる。愕然となりました。

その相談にうかがうべく、いつもの指定の診察を待っていたところ、カーテンを透して先客の患者さんが、手術の結果であろうお礼を述べています。聴くともなしに聞こえてくるのは、

「先生は神様です。有り難うございました」というお礼の言葉である。私の心はさらに決まりました。こういう場合、仏様とは言わないものだ、とも感心。この言葉は、私の背中を押してくれました。

さて、長い入院生活が予想された。結果的には入院、一週間後手術、後は、リハビリを中心とした二、三ヶ月らしい。その中には、伊豆の分院へ移動もあって、湯治？というような期待も楽しめました。実際はそんな甘

いことではなく、療養専一で、いわゆる温泉に浴することなどはなかったのですが、初めて家を長期離れての暮らしで、少々寂しくはあり、また楽しくもありました。

さて、その仕事ですが、私には、ここ、十年以上になる懸案の考え事があったのです。それは、『妙法蓮華經』、いわゆる《法華經》第二品（章）「方便品」^{ほうべんぽん}、とくに「言辞」^{ごんじ}（最初經文では「言教」となっている）、を考へることでした。これは、とくに、もちろん、浄土宗で取り上げて大きく説教する事がありませんが、浄土宗の方が聞かれても、せいぜい、「嘘も方便」くらいにしか興味がない方が多いでしょう。

この「言辞」は、浄土宗では、もちろん、当の天台宗、その他の《法華經》を中軸とする御宗旨でも、私の見たかぎり、八、九回も、くり返しくり返し、現れていて、これに気づかないわけではないのに、だれも、説明もしないで、今日に至っています。

私は、この《法華經》「方便品」のことは、学問上の発表としては、平成四年「大正大学研究紀要第七十七輯」にくわしく発表させていただいています。かなり思い切った発表のつもりでしたが、一顧だにされませんでした。不思議に思っただけで今日に至っております。

思うに、その一番の理由は、『法華經』は、後で述べますように、なんとと言っても、漢訳《法華經》による天台大師智顗の註釈と解説をされたことが宗の基本図書、金科玉条となっているからでもあります。

言辞という鍵

さて、『妙法蓮華經』の「妙」「法」を言辞^{ごんじ}の立場で分解し、理解し、解釈していったら、理解を深めることとします。

妙法は漢字からみて、すばらしいとか、正しい、妙なる、微妙な、等々の意味は、皆さんも、おわかりのとおりです。

実は、この「妙法」は、元のインドの梵語

に還って考えないと、お経の折角の意味が、もう少し分かり難いので、次のように、考えることとします。

「妙」は梵語で「サツツ sat」、「法」は「ダルマ dharma」といいます。皆さんはどちらも前からご存じで口にしておられる言葉です。

皆さんは、「菩薩」という言葉は、ご存じの方が多いいと思います。「サツツ sat」はその「菩薩」の「薩^{さつ}」です。「菩薩」というのは「菩」は「覚」（悟り）の意味で、「薩」は、悟りを求める人という意味となります。この場合、薩は人、人間という意味です。

他の解説書はやはり日蓮宗の方々のが、圧倒的に多いのですが、南無妙法蓮華經の御宗旨ですから当然と言えます。しかし、先ず、天台宗の宗祖とされた天台大師、智顗の解釈が基本のようです。それを見ましても、ふつうの「言葉」くらいにしか扱っていません。

これに対して、私はその重要な『妙法蓮華



延暦寺根本中堂



法然上人得度の地

經』の「妙法」を、漢訳ではなく、梵語で解釈するという方向ですから、門外漢として立場が違う、と無視されているのかもしれない。

漢訳基本の中国仏教、天台大師を宗祖と仰げば、その御解釈にそわないと、宗旨とは言えないでしょうから当該各宗派の方は止むをえません。幸か不幸か、私は浄土宗です。『法華經』を宗典として傍らに拠り所としますが、内容上のことで、一字一句、拠り所というものではありません。

大げさのようですが、『法華經』の大註釈者、天台大師智顗^{ちぎ}もお考えになっていないことは、関係各宗の方でも、現在まで、考えられ考察されていないと思われます。そこで束縛のない浄土宗の私どもは、自由に考えていいことになろうかと思ひます。

そう考えると勇氣のようなものも出て来、初めて、この言葉を考えさせていただけるといふ、喜びも湧いてきます。しかも、ゆっく

りとした長い入院生活の中の時間があることは有難い御加護とも喜べるようです。

幸いにも、未だ、誰も解説したことのない解説です。読書百返、意自ずから通ず、ということを身を以て知りました。

この読書百返、意おのずから通ず、ではありませんが今回の入院は、「方便品」のいわば意識みたいなもので、有り難く、また楽しい引きこもりです。この入院生活は、まことに良い機会でした。『法華經』の御陰かもしれません。伊豆は日蓮宗縁の地でもあり、ふしぎな回り合わせだなと思ひ、經文を眺め、思案させていただきましました。

その經文の印刷されてあるのは『大正新脩大藏經』^{だいていしんしゅう}というお經の叢書をコピーし、A4版で六頁ですから、ベッドでも手にとって気楽に読むことが出来ます。折り畳んでポケットに入れて持っても歩けます。

思ひおこせば、私は若い頃、仏教の学習に手を初めた頃、『法華經』というのは、難し

延暦寺常行堂(左)と法華堂(右)



黒谷青龍寺への参道



い仏教に属する、つまり、聖道門、聖の道の方なので、私どもの浄土門には関係がないものとして、関心が全くありませんでした。

今や「言辭」という真の理解の鍵を、緊張して、『法華經』の鍵穴に入れたようです。

《法華經》と法然上人

しかし、入門段階では、ともかく、『法華經』は仏教のお経の中でも王様として、全仏教の基礎ともされ、浄土宗の宗祖、法然上人も、比叡山に入って先ず仏教を学ばれたのは、『法華經』の基礎的大注釈書の「法華三大部」でありました。このことが、御念仏を申す我々は、あまり念頭にないようだと痛感されます。

法然上人は「法然上人行狀絵図」に、

「生年十六歳の春、初めて本書を開く。

三カ年を経て、三大部を亘り給いぬ」

とあります。この三大部こそ、『法華經』の大注釈書、天台大師智顗著作の『妙法蓮華經文句』『妙法蓮華經玄義』『妙法蓮華經文句』

『摩訶止観』各十卷（各上下巻とすれば、各二十巻）です。これを読むだけでたいへんな学習でありまして、法然上人の御教えの中に、吸収、消化されていると考えられます。

思えば、浄土宗の御念仏とはたいへん深い関係があることが分かります。法然上人のお話には一々、『法華經』の何処にこのように書かれているとかという説明じみたことはありませんが、天台宗のある先生が、法然上人の法語等を見ても、『法華經』を読んでおられるということが分かりますね、と述懐されていました。

梵語の世界的權威、浄土宗の荻原雲来博士は『法華經』の原典出版をされ、同松涛誠廉先生は、翻訳出版をされてもいます。それでも、浄土宗の私が大正大学で『法華經』を講義していましたが、聴講の天台宗の院生がレポートの末尾に「浄土宗の先生に法華經の講義を聴くとは思わなかった」と書いたのがいまして、今さらのように、天台等、他宗の人

では、浄土宗は《法華經》とは関係がないんだ、と思っっているようです。いわんや《法華經》の中に阿弥陀仏のことが説かれているのに、宗論を試みたりするのは、《法華經》のほんとうの教えが知られていないからではないでしょうか。

そのへんの所を、狂言の『宗論』というのは、面白く可笑しく、皮肉って演じられています。信濃の善光寺に参詣して京都に上る念仏の僧と、甲斐の身延山に参詣して、京都に上る南無妙法蓮華經を唱える法華僧との法門争いが演じられます。

「南無阿弥陀仏だ」「南無妙法蓮華經だ」と

言い争う中に、興奮して、念仏僧は「南無妙法蓮華經だ」、法華僧は「南無阿弥陀仏だ」と混乱してしまいます。「宗論はどちらが負けても釈迦の恥」というが、同じ仏教で、自分の宗が勝れている、といっても、所詮、同じ仏教ではないか、ということ、狂言独特の、面白、可笑しい表現で演じ聴かせます。

先般も浄土宗の僧侶の方が、《法華經》を出版されましたが、珍しいことと言うべく快挙というべきでしょう。法然上人の足跡を辿り、その御心を慕い、我が信仰を深め、確認するのも、後進の道かと思えます。今の言葉で「追体験」とでも申しましょうか…。

古き伝統技 三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替00180-2145231

寺院紀行

群馬・太田

大光院

撮影／タカ才力邦彦

文／真山剛



立派な伽藍に比べると少々小さい山門だが、吉祥門と徳川家康公が名づけた由緒ある門だ

浅草から東武線に乗っておよそ二時間、群馬県の太田という駅に着く。駅前のタクシーに乗り込み、「大光院にお願いします」と告げると「ああ、子育て吞龍さんね」と運転手さんが応える。

運転手さんの吞龍さんの話を聞きながら十分弱、お寺の駐車場ではなく、参道の入り口で止めてもらった。

資料で見た明治の頃の松並木の参道であろうはずはないが、両側に土産店が並ぶ長野の善光寺のような参道を想像していた。だが、「最近では車で行く人が多くて、みんな参道を通らないんだよね」という運転手さんの話の通り、それこそ百メートルほどの参道はお土産屋さんもまばらで、開いていたのは山門前の二軒だけだった。

それでもお店の正面には子供の疳かんの虫をおさえる虫封じの太鼓が並んでいて、そうかここはやっぱり子育て吞龍さまのお寺なのだなと安心した。ふと見るとマンホールの蓋にもお寺の絵が描いてある。

そして目を上げると山門がそこにあり、「正面に山門が聳そびえ」と書きたいところだが、太田を代表するお寺であり、関東に十八しかなかった浄土宗の学問所としての檀林という大寺の山門にしては、そう、かなりこじんまりしている。

「大光院を創建したのは徳川家康公で、ちょうど大坂夏の陣で大坂城を落城の知らせの時にこの山門が完成、それを家康公は喜び、自ら吉祥門とこの門を名づけました。ですが、間口三間、奥行き一間



臥龍の松は吞龍上人のお手植えで、樹齢七百年ながらその枝ぶりはまさに龍を思わせる勢いだ

の切り妻造りのこの門はほかの堂宇に比べると少々小さいのですが、まさに豊臣との戦時中、山門にまでは潤沢に資金を使えなかったのかもしれない」

大光院の執事はこう説明してくれた。

浄土宗寺院は江戸時代、徳川家が増上寺を菩提寺とすることで全国的に急増、かつ徳川家の寄進を受け、伽藍を再整備した寺院も少なくない。これまで訪れた浄土宗寺院にも徳川家、とくに三代家光公によって建立、修復された寺院は枚挙にいとまがない。

そうした中で祖父家康公が徳川家の先祖、新田義重公を供養するために建立したこの大光院を家光公がおろそかにする筈がなく、祖父が名づけた吉祥門を敢えてそのままにすることでその「吉祥」を子孫に伝えるため手をつけなかった、ということかもしれない。

さて、この吉祥門をくぐると正面に本堂、左手前には大光院幼稚園、右手には吞龍上人お手植えの臥龍の松。そして左手奥には開山堂が、そう、「聳え」ている。

実はこのシリーズ、もう十年以上続いているのだが、巻頭カラーページの扉には必ずそのお寺の本堂の写真を使っている。しかし、今回初めて本堂の写真ではなく、開山堂の写真が扉を飾っている。

昭和九年、寺院建築では全国初の鉄筋コンクリート造りの十三間四面という巨大なお堂が再建された。この開山堂の入仏式には大名



大光院のある太田は日本初の飛行機会社となった中島飛行機、発祥の地。写真は創始者の中島知久平氏の銅像。中島飛行機はやがて富士重工となりスクーターや名車スバルを世に出した

行列のイベントもあり、午前中に十万人の人出があり、正午過ぎには太田町に食べ物が無くなったという。以来、自作といわれる呑龍上人像を奉るこの大伽藍にどれだけの子供が、そして親がお参りに来たことだろう。

「大光院は信徒寺です。いわゆる町寺のような、檀家さんで成り立っているお寺ではありません。呑龍上人への信仰心、これがこのお寺を支えているのです」

こう話してくれるのは大光院第六十九世であり、行安寺第二十三世でもある鈴木靈孝貫主である。聞けば大光院の檀家数は百軒にも届かない上に、境内地は広いが家作などの収益事業はなく、信者の布施だけで維持している信徒寺、そう、呑龍上人の寺なのである。

さて、呑龍上人の話の前にこぼれ話をひとつ。昭和九年に鳴り物入りで完成した太田大光院の開山堂だが、この伽藍と同じ形に作られたお堂がある。屋根は戦災で変わったものの、浅草はかっぱ橋通りに面する行安寺の本堂がそれで、スケールこそ違うが大光院開山堂と同じ設計士、同じ材料、同じ形のお堂なのである。

太田の大光院開山堂の再建時の貫主は鈴木靈真師、そしてこの鈴木靈真師は現貫主の父にあたる方で、大光院六十六世千野学誠貫主からその法灯を受け継いだ、行安寺の住職でもあった。そこで同時に群馬太田の大光院、東京浅草の行安寺の伽藍を再建したのであ

大光院の寺名は徳川家先祖に新田義重公の名前とその戒名、大光院殿からとった。本堂にかかる新田寺の額は尊超法親王の御染筆。近隣に新田氏の遺蹟は多い。写真は金山城の城壁跡と本丸跡に建てられた新田神社。金山城は見事な山城で大光院はそのふもとに建立された



る。蛇足だが、この二つのお寺は靈真師の長男靈海師から三男靈孝師へとその法灯が継がれている。

さて、吞龍上人信仰だが、これはまさに冒頭のタクシーさんの「子育て吞龍さん」の返事の通り、子育て吞龍さんと縁を結ぼうと県内はもちろん、関東周辺、いや全国から多くの参詣者がやってくる。

ご主人、おじいちゃんやおばあちゃんに付き添われ、赤ちゃんを抱いたお母さん、大きくなったお腹を夫婦で気遣いながら階段を上がる若夫婦、子供の名前を決めてもらいに来る父親。祈願の法要は一日五回、休むことなく一年中続けられている。祈願は吞龍上人への「お弟子入り」、名前をつけてもらう「授名」で、取材に訪れたのは七月後半の平日だったが、その日だけで五件の授名とそれを含めた七件のお弟子入りがあった。

安産や子供の成長を祈る気持ちは今も昔も変わらない。今も吞龍上人に「お弟子入り」すると、男の子でも女の子でも吞龍ぼうずと呼ぶことがあるが、それこそ数十年前には吞龍ぼうずの中には吞龍あたまべんぼうといって、中国の辮髪べんぼうのように頭の後ろの毛だけ残し、長く伸ばす子がいた。親がその毛をつかんで、子供が転ぶのを防ぐためだ。今の子供たちは転ぶも何も、ゲームばかりしていて転ぶ機会すらない。この吞龍あたまが必要だった時代のほうが子供が子供らしかったということだろう。



「当時の檀林といえは別格の特別な寺院で、その住持が直接子供たちと触れ合っていたとは思えません」とは史学の先生の言葉だが、吞龍上人が「子育て」という冠をつけられるようになったのは、貧しい近隣の子供を自分の弟子にして育てたことからそう呼ばれている。今年の四月に吞龍上人生誕四百五十年記念出版として発行された『人間愛に生きた子育て吞龍上人絵伝』には子供たちと触れあう吞龍上人の絵が多数書かれている。発行は吞龍上人絵伝刊行会でその相談役の鈴木貫主はこういう。

「確かに大光院は檀林の中でも特別な寺院でしたので、住職である貫主が直接子供と触れ合わないかもしれませんが、物事には道理ではすまないことがあります。実際に裏山のふもとにある歴代住職墓の横には、吞龍上人が住持の地位を捨て一緒に小諸に逃げ、五年もの隠遁生活をしていた鶴殺しの源次兵衛の墓があります。こうした実際の吞龍上人の行動をみると、上人が路頭に迷う子供たちに救いの手を差し伸べたとしてもなんら不思議はありません」

鶴殺しの源次兵衛の話とは、国禁と知りつつもその生き血を飲ませ病の父親を助けようと鶴を殺した話で、役人に追われる重罪人の源次兵衛が吞龍上人の名声を聞いて大光院に助けを求めたところ、親孝行と吞龍上人が源次兵衛をかくまい、かくまい切れなくなるとなんと一緒に寺を出たという話で、二人は長野の小諸にある仏光寺



境内奥には大光院の歴代住職のお墓が並ぶ。開山の吞龍上人をはじめ、多くの名僧が住した大光院だが、近年では明治初年の日野靈瑞上人がその中でも特筆すべき名僧だった。また新田義重公の墓所がある

に逃げ込み、そこで二人は五年もの月日を過ごしている。

吞龍上人の師であり、浄土宗の基礎を作り上げた観智国師の懇願でようやく許されたが、一庶民のために地位も名誉も投げ打った吞龍上人は一躍時の人となり、以来、名僧として今日まで親しまれているのである。その親しまれ方は、吞龍上人のご分身などが北関東を中心にあちこちのお寺に安置されていることでもわかる。浄土宗以外の寺院も数か寺含めて八十に及ぼんとする吞龍上人有縁寺院があり、いまでも吞龍さまの縁日を開いているお寺もある。

こうした吞龍信仰を明治期に確立したのが大光院第六十三世日野靈瑞貫主だ。文政元年（一八一八）信濃（現長野県）に生まれ出家、若くして浄土宗義を究め、生実（千葉県）の檀林大巖寺から大光院に入り、その後増上寺、そして知恩院の法灯を継いだ近代の名僧のひとりだ。この靈瑞上人が明治になり徳川家の庇護を失った大光院を維持、興隆させるために吞龍上人の号から故信講こしんこうという組織を作り、信者を大いに増やしたことが大光院の基礎となっている。

講数は三百七十五におよび、講員数およそ十万人。明治九年の故信講以来、太田といえは大光院の町となった。大正六年に中島知久平が中島飛行機研究所をこの太田に設立、日本の飛行機事業の開拓者となり、その後スバル、富士重工という自動車メーカーとなり、数年前にはすばるという住所まで誕生するまでになったが、とにかく

く太田といえは大光院で、江戸時代からの献上金山松茸^{かなやま}が名物として少々有名だったぐらい。

この故信講の組織力か、明治四十一年には全国神社仏閣信徒指標で大光院は、はえある第一位になっている。太田の歴史を写真で見せる本には信徒で境内があふれかえる写真や、町中での大光院の盛大な行事の様子などが載っている。九月七日から三日間行われる開山忌、全国一の規模の菊花展、関東三大節分会に数えられた節分、花まつり、吞龍上人の大祭、とにかく人が集まり、明治四十二年に東武鉄道が開通して太田にも駅ができてからは参詣者が一段と増えた。

こうした講員に支えられる中で昭和の始めに開山堂の再建となったが、日野靈瑞上人に師事した鈴木靈真上人も講とは別に衆生会^{しゅうしやうかい}という組織を作り、再建ばかりか寺門や地域の興隆をはかった。

このように一六一三年、徳川家康公が新たに建立した義重山新田寺大光院は開山上人「吞龍上人の寺」として今日に至っている。

「信徒寺の大変さもありますが、名利として風習を大切にすることで、多くの方に参詣してもらい、祈願を受け止め続けるお寺であって欲しい。ただそれだけです」

浅草の町寺、行安寺でインタビューさせていただいた鈴木貫主は軽くはにかみながらこう締めくくってくれた。（ルポライター）



明治四十一年に東武鉄道が開通、太田駅が誕生した。だが、国鉄（現JR）が乗り入れなかったことで隣の足利市駅（栃木県）よりはこじんまりとしている

2006

Kajitani Yoshika

梶谷佳加

比叡山の麓の小さな工房で、
その土地の土を丹念に練って、
陶人形を作っている一人の女性がいます。
郷土人形のような、
土の香りのするその人形たちから、
たくさんのぬくもりが伝わってきます。
誰もがみんな持っていた童心。
誰もがみんな大事にしたい童心。
そして誰もがみんな持ち続けたい童心。
そんな私たちの心に、
人形たちが呼びかけてくれています。

1970 奈良県生まれ
1988 京都芸術短期大学造形芸術学科陶芸コース入学
1989～入選歴
中日国際ビエンナーレ、京展、関西展
奈良展、天展、美濃国際陶磁展、長三賞展
1992 京都芸術短期大学陶芸コース専攻科修了
1997 滋賀県大津市山中町に独立
<http://www.eonet.ne.jp/~kajitani/>

表

紙

の

言

葉

9月号は お月見

陰暦八月十五日のお月さまは「十五夜」「中秋の名月」「望の月」「今宵の月」などと呼ばれ、鑑賞の対象とされてきた。

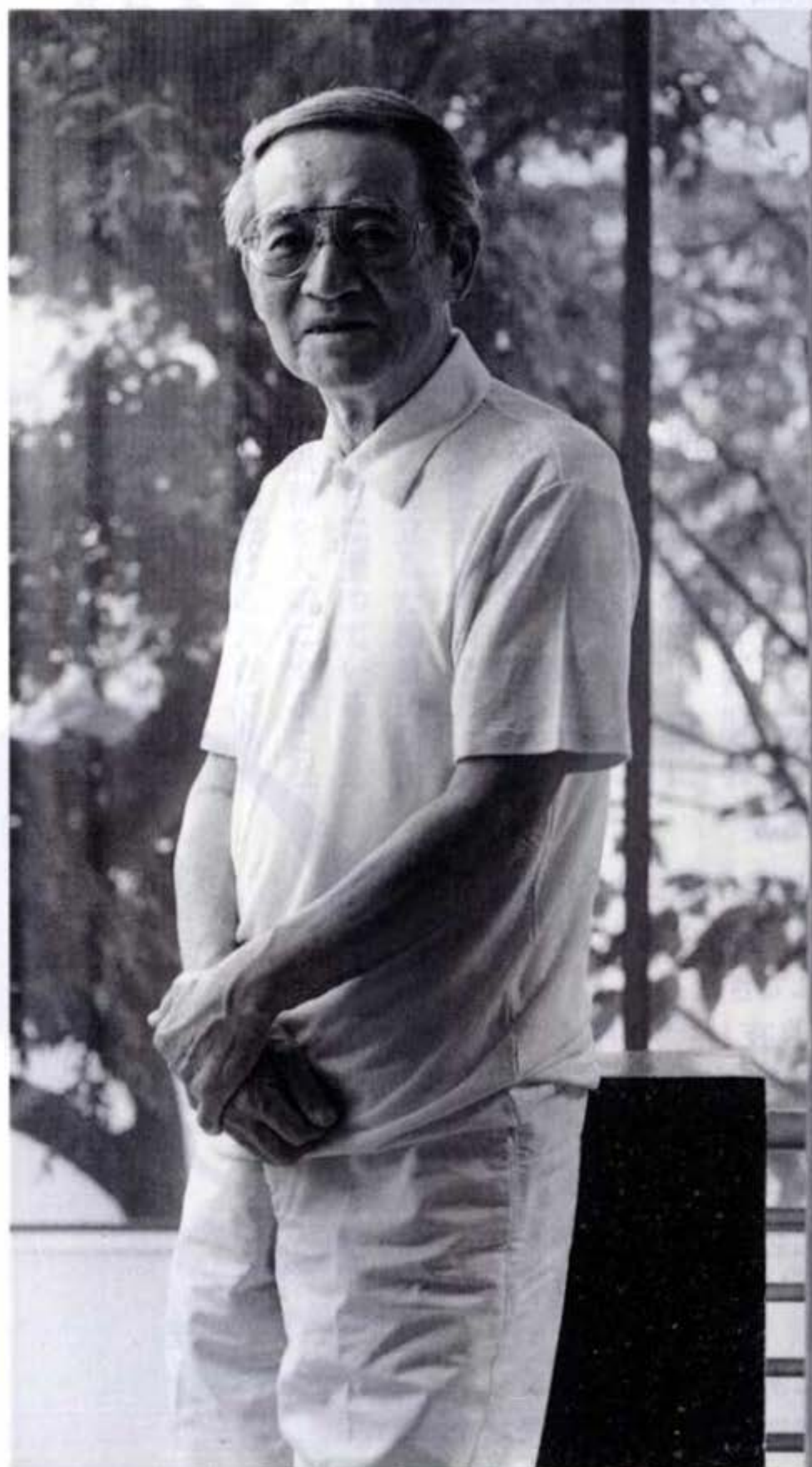
天気が良いと「良夜」、雲が厚くて見えない場合を「無月」さらに雨まで降っていると「雨月」といって、その場合は十六夜(いざよい)十七夜(たちまち)などに期待を掛けた。

月見は中国の中秋節の影響で始まり、中国では月餅を食べていたものが、日本では月見団子に変わった。

もともと日本にあった初穂祭つまり秋の収穫祭と重なって民間に定着し、特に里芋や栗の収穫期と一致したので、「芋名月」「栗名月」と呼ぶ地方もある。

連載

会いたい人 関 容子



五十嵐豊芳さん
②

撮影／タカオカ邦彦

五十嵐さんの芸大音楽科時代、同期の作曲科に直代さんはいたが、回り道をした五十嵐さんとは六歳の開きがあった。そのころ作曲科の学生十八人中女性は四人だったし、そうであっても、美人で田園調布のお嬢さま（父上は東京女子医大教授の中村敏郎博士）の直代さんはほかの学科の学生たちからも熱い視線を送られていた。

「家内は関西人と、眼鏡かけてる男と、音楽家は嫌いだったんですって。ぼくは全部あてはまる（笑）。でも英語とかフランス語とか、各科共通の授業というとなぜかぼくの隣りへ座るから、気があるのかな？　と思った。彼女に言わせると偶然だそうですけど。当時ぼくは洗足池の四家文子先生のお宅から通っていたので、お互いに東急沿線ということとで電車で一緒になることがよくあつてね。ある日、上野に着いたら雨が降ってきて、ぼくが傘持ってたなかったら入れてくれた。それで映画に誘ったら、『セールスマンの死』のときは断

られたけど、『風と共に去りぬ』はOKしてくれて、それが最初のデートかな。春に入学して、その年の十二月のことですよ」

若い東京の娘が関西人と眼鏡の若者がいや、という感じは私も昔の東京娘なので何となくわかるけれど、音楽家がなぜいけないのか、直代さんに伺ってみた。

「だって、当時藤原義江さんが藤原あきさんと離婚したばかりだったし、六つも年上の大人で、遊び人かと思って警戒してたのよ。隣りに座ったのは、ノート見せてくれるし、いろいろ教えてくれたから（笑）。男の人と映画を観て来た、と母に言ったら、その方をすぐうちへお連れしなさい、って」

五十嵐さんは臆せず直代さんのお宅を訪ね、それから一年のうちの半分以上、「お言葉に甘えて」中村家の食卓についた。

「お医者さんのおうちで、御両親はお酒飲みませんから、酒もビールも山ほどあったんですよ。おいしいものもたくさんあるし（笑）」

若きテノール歌手五十嵐喜芳はその歌唱力で
多くのファンの支持を得る



夏や冬の休暇で神戸に帰省すると、「毎日のように速達が届いた」と直代さんがぼやす。

「母がびっくりして、何か急用なの？ って訊くんですけど、今日は雨が一日降っていたとか、レコードをずっと聴いていたら誰それの歌が良かったとか、そんなことばかり。私もせっせと返事は出しましたが、まさか速達にはしませんでしたよ」

するとすかさず五十嵐さんが切り返す。

「書留だったじゃないか(笑)」

五十嵐さんのリリックな美声と天分は芸大在学中から楽壇の注目を集め、芸大教授で指

揮者のニコラ・ルツチ氏に認められて特別レッスンを受けながら、コンサートやオペラや放送などに活躍していた。

「芸大四年のときに毎日新聞とNHK共催の音楽コンクールを受けることになって、やっぱりそれは不安でしたね」

直代さんはその話を聞くと、母上が何かにつけてソロバン占いが好きなので、すぐに入賞の成否を占ってもらいに行った。結果は上々吉。それがどんなに五十嵐さんを勇気づけたか、はかり知れない。

「ビゼーの『真珠取り』のアリアを歌いました。この曲は第一声が非常に難しいんですが、幸いピアノニッシモもうまく出て、声楽部門で第一位、声楽部門初の特賞になったんです。その占いの人によろしくね、って家内に言いましたね」

それからますます演奏活動が忙しくなり、将来イタリアへ歌の勉強をしに留学する資金を作るために、専攻科の授業も欠席しが

ちになった。

「すると、安宅産業の安宅英一さんに呼び出されて、どうしてそんなに稼ぐ必要があるんだ、と怒られてね。安宅さんはぼくの芸大一年のときからずっと奨学金を出してくださってた方なんです。四家先生の紹介で歌を聞いていただいて、それから毎月決った日に東京駅の前にあった安宅さんの会社に伺うと、秘書が一万円渡してくれる。社長のポケットマネーでしようね。芸術をめざす若者を支援してやろうという粹な実業家。そういうタイプの人が近ごろ少ないのが寂しいです。それで、当時の一万円は大きいですし、四家先生のおうちの居候時代ですから、その日一日だけはずいたくをして、銀座のスエヒロに寄ってピフテキ食べたかったけどカツレツにして（笑）、ビール一本飲んで帰る。家内の実家に通い始める前ですからね。で、安宅さんに呼び出されて……稼いでるのはイタリア留学のためですと言ったら、よし、旅費も滞在費も

昭和三十八年の二度目のイタリア行き。この時は最初のイタリア行きで結婚した直江さんとの間にできた娘の麻利江さんとの三人での旅立ちとなった



五十嵐さんは昭和二十八年頃、恩人である四家文子先生（写真中央）と「カルメン」の舞台に立った

全部出してあげよう、ってことになった」

それで急遽イタリアへの道が開け、五十嵐さんは直代さんにそのことを告げる。つまり事実上のプロポーズ。

「イタリアへ行ってくるから二年間待っていてくれないか、って言ったんです。そしたら、私も行く、って。それからイタリア語の個人レッスンを受けるやら、私費留学の許可をもらうのに文化庁の試験を受けるやら、その素早いことと言ったら（笑）」

横で笑いながら聞いている直代さんが、

「だいたい私は早いんです。子供のころ、ピアノ習いたいと言い出したのも自分だし、物足りないからって次の先生は自分で探してきましたから」

だから五十嵐さんが「二年待つて」と言い出す前に、縁談も数多くあった中で未来の夫はこの人、ともう直代さんは決めていた。

「ソロバン占いでね、母が五人ほど名前を挙げた中で、将来世に名前が出るのはこの人、

って主人のことを言ったそうです。でも女難の相も出てるから気をつけて、って（笑）」

五十嵐さんは泰然として、
「もてないようでテノールが歌えるの？」

昭和三十二年七月、五十嵐夫妻はローマに渡る。結婚式を挙げる時間もなくて、六月に入籍しただけだった。

「二人でままごとみたいな新婚生活。最初のころは言葉もよく通じないで失敗ばかりしました。ローマに来てまだ日が浅かった夏のこと、トンカツが食べたくなって、自分で肉屋に行きました。ぼくの字引によれば豚はポルコですから、デュエツティ・ディ・ポルコ（200gの豚肉）と言っても、みんな怪訝な顔をしてポカンとしている。中には笑い出すやつもいて、でも食べたい一心から四つん這いになってブーブー、ポルコポルコと、連発したら大笑いされて、それでも通じない。あとで大使館の日本人に訊いてみたら、豚はマ

イヤーレーで、ポルコというのはウスノロだつて(笑)。自分でウスノロだと言つて笑われてきたわけですね。どっちみちイタリアでは夏には豚肉を売らないものなんだそうですけど」さて、五十嵐さんのイタリア留学で最大の収穫と言え、往年の名テノール、ティート・スキーパと出会つたことだろう。

「スキーパは日本ではあまり知られていないけれども、当時欧米では『歌劇王カルーソ』の映画で有名なカルーソと、ジーリと、スキーパが三大テノールと言われていたんです。ぼくがイタリアへ行つたとき、カルーソはもう亡くなつていたし、ジーリは行つた途端に亡くなつた。盛大なお葬式で、残念、聴きたかつたなあ、と思いましたね。それでスキーパだけは健在だけど、どこで聴けるのかと思つていたら、ある日の新聞の映画欄に、ティート・スキーパ来たる、と小さく出ていたんです。半信半疑で、ぼくらのアパートのすぐ近くのみずばらしい映画館に出かけてみる

と、休憩のあとに幕が開いて、そこに六十七、八になるスキーパがピアノの前に立つていた。それを目あてのおじいさんおばあさんたちが喜んで拍手してね。彼はトスティとかレパートリーの中から五、六曲歌いました。日本人で彼の声を聴いた人は、いくらもないんじゃないですかね」

直代さんも感激して、楽屋へサインをもらいに行こう、と言ひ出した。こうした積極的な女性と結婚したのも五十嵐さんの幸運のうち。「快く会つてくれてね、日本へ歌いに行きたかつたけど中国までしか行つてない、と言つて、ぼくが歌の勉強に来てる、と聞くと、いつでも訪ねていらつしやい、といつて電話番号を教えてくれた」

「翌日、すぐ電話をかけたのも私よ」と直代さんが続ける。

スキーパを訪ねると、意外と小じんまりした家に、若い美人の奥さんと住んでいた。

「女優だったという背の高い素敵な人でした

よ。スキーパ自身は肥ってて、背はあまり高くない。二人の間に三歳くらいの子供がいました。この女性と結婚するのにお金がいったんで、あんな映画館のアトラクションに出たのかなあ、とそのとき思いましたけど、あとで聞くと彼自身がファシストのムツソリ一二を信奉して、財産をすっかり寄付してしまっただけなんですけどね」

五十嵐さんは、スキーパの家の「ポコポコのピアノで」、ドニゼッティの『愛の妙薬』から「人知れぬ涙」を歌った。

「君はわたしと同じ、リリコ・レツジェーロ（軽くて叙情的）だね。君に歌ってほしいのはマスネの『ウエルテル』だ。幸いわたしにはアカデミア・スキーパという学校があるから、そこへいらつしやい、と言ってくれたときは嬉しかったですね。そこへ通って、一年間、『ウエルテル』だけをていねいに教えてもらいました。またちようどうまい具合に、芸大三年のときに教わったニコラ・ルツチ先

生がローマに帰ってて、ぼくのことを聞いて訪ねてこられて、ずっとぼくの伴奏をしてくれたんです。スキーパ先生の教え方は、自分では歌わずにじつと聴いてて、細かく指示を与えてくれるというものでした」

因みに、五十嵐さんは帰国後一度も日本で『ウエルテル』を歌っていない。マネージャーがどこへ持って行っても上演には至らず、その後タリビアーニが来て一回歌ったが、やはりお客が入らなかったそうだ。

「自分ではできなかったこのオペラを何とか上演したいとずっと思ってた、ぼくが新国立オペラ劇場の総監督に就任してじきに、テノールのサツパティエーニがマスネの『マノン』を歌ったとき、じゃあ次は同じマスネの『ウエルテル』はどう？　と言ったら、大好きなオペラだ、って喜んじやって、結局その四回の公演は超満員でしたからね。オペラのお客さんもずいぶん進歩した、ということでしょうね」

（つづく）

まさにいま多生たしょうこうごう呎劫をへて、生まれがたき人界にんがいに生まれて、無量劫をおくりて、遇いがたき仏教にあえり。釈尊の在世に遇わざる事は、かなしみなりといえども、教法流布の世に遇う事をえたるは、是れよろこびなり。

〔登山状〕

まさに今、幾度となく生死輪廻を繰り返しつつ永い時を経て、生まれ難いこの人間界に生まれてきたのです。そして、量り知れないほど長い時間の果てに、ついに遇い難い仏教に出会うことができたのです。お釈迦さまのご在世中に直接お会いできなかったのは確かに悲しいことですが、そのみ教えが広まっているこの世に生を受けたのは、実に喜ばしいことです。

「優曇華うとんげつて、存じですか？」——遇い難い佳辰に巡り会い——

とある夕暮れ、講義を終え、部屋に戻る廊下で。

「あつ、ちょうど良いところに来てくれた。〇〇さん、この林田先生が丁寧に答えてくださるから。それじゃ、あとはよろしく！」

「えっ、△△先生、こういったことでしょうか？あー、行っちゃった……」

「林田先生、突然ですみません。実はTBSテレビの『クイズ！日本語王』という番組スタッフから問い合わせがありましたので。先生、優曇華^{うどんげ}ってご存じですか？」

「はい、知ってますが……」

それから三日後、大正大学の浄土学閲覧室でカメラを前にして。

「優曇華とは、こういった花なんですか？」

「はい。優曇華はイチジクの仲間で、毎年、花は開くのですが、その花を外から見ることにはできないそうです。そうしたことから、仏教徒の間で、この花は三千年に一度しか咲かない、きわめて珍しい花だと言われるようになりました。そこから転じて、遇い難い尊い出来事に出会える喩えとして用いられるようになったのです。例えば、み仏がこの世にお出ましになること、あるいは、そんなみ仏の教えに巡り会うことなどです」

「なるほど。それでは優曇華という名前の由来について教えていただけます

か？」

「はい。もともとインドでは優曇華をウドウンバラ・プシュパと呼んでいました。ウドウンバラが植物の名前で、プシュパは花という意味です。この花は『華嚴經』や『般若經』など、多くのお経で紹介されています。やがて中国に仏教が伝来し、このウドウンバラの部分が「優曇華」と音写されていたようです。中国唐代の『一切経音義』という典籍には「優曇華の葉は梨に似ている。実の大きさはこぶし大で、その味は甘い」などと解説されています。とはいえ、私自身は実物の優曇華を見たことがないので、今度は植物学の先生を訪ねてみるというですよ」……

二時間程の収録を終え（映像で流れるのは、ほんの数秒でしょうが）、傍で見ていた学生たちが、口々に「先生、お疲れ様でした。あんなに細々と注文をつけられるものなんです」と言ってくれました。仕事柄、人前で話をするのは慣れていたつもりですが、実際にテレビカメラを前に、細かい注文をつけられて応答するとなると実に緊張するもので、説明もしどろもどろでした。なんともお恥ずかしい次第です。

それにしても、こういった形でテレビの取材を受けることなど、おそらく今回が最初で最後となることでしょう。そして、その題材が、遇い難い出来事に

喩えられる優曇華だったというのも、正に不思議な縁としか言いようがありませんでした。

そんなことを思いながら、宗祖法然上人八百年大遠忌を五年後に控えている自身の境遇がふと脳裏をよぎりました。よくよく考えてみれば、八百年大遠忌という佳辰に巡り会えることの尊さに感謝せずにはいられません。おそらくこのエッセーをご覧いただいている方々の中で、九百年大遠忌に参列できる方はただの一人としておられないでしょうし、よほどお若くなければ八百五十年大遠忌も難しいからです。

今から二千五百年前、お釈迦さまのご説法をこの耳に拝聴し得なかった私たちですが、そのお釈迦さまのご本懐である、阿弥陀さまの選択本願念仏のみ教えに、今、私たちは巡り会えたのです。そして、この尊いみ教えを見出された浄土宗祖法然上人の八百年大遠忌という佳辰に連なることができます。私たちに出来ることは、この勝縁を素直に喜んで、日々お念仏を称えつつ、この尊いお念仏のみ教えを一人でも多くの方々に結縁していくことでありましょう。そして、来るべき八百五十年大遠忌、九百年大遠忌には、より大きくお念仏の声が響き渡っているような道筋をしっかりと遺していくことでありましょう。合掌

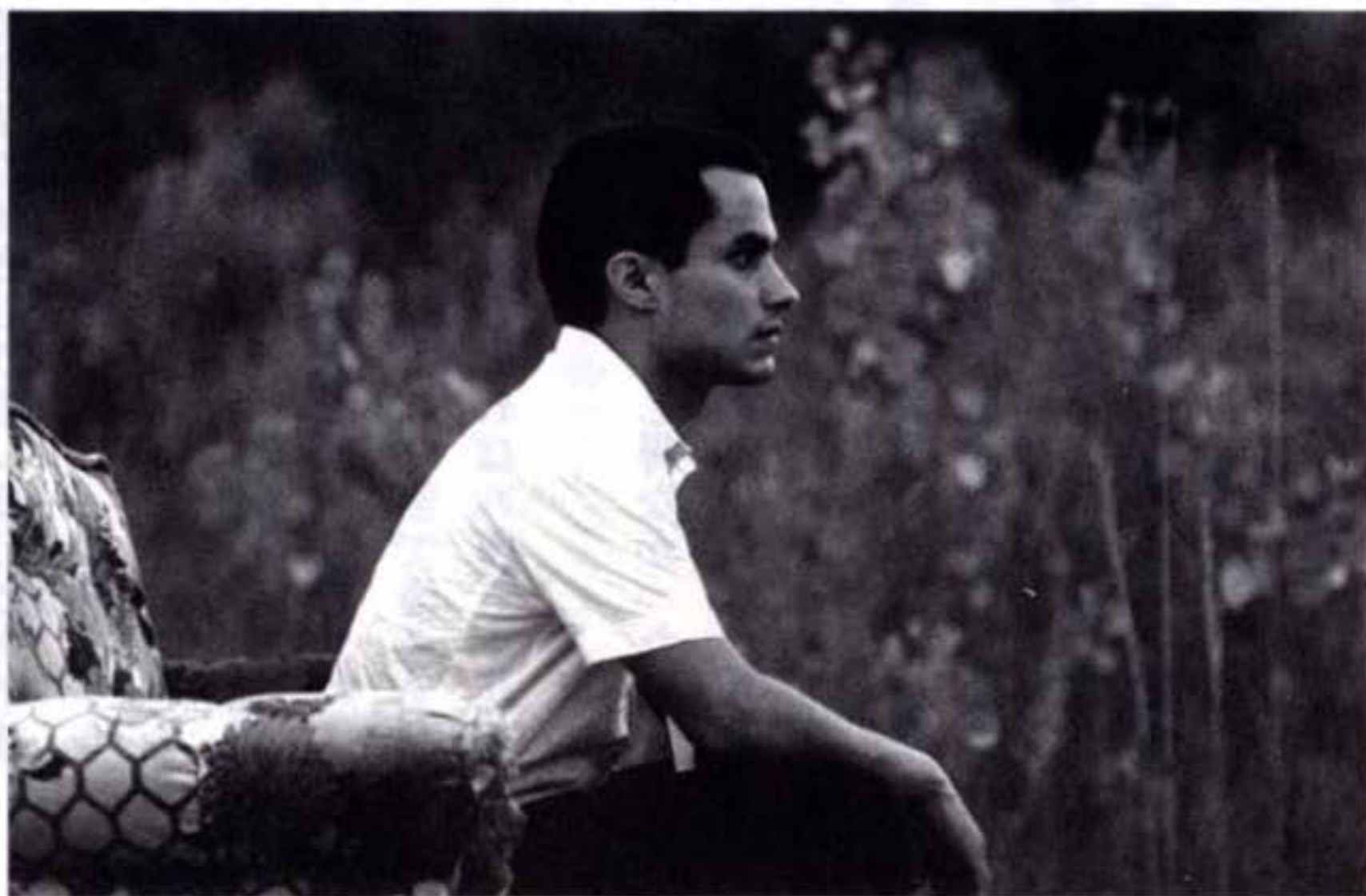
（大正大学専任講師・林田康順）

袖山榮眞 SCREEN

シネマ随想

キング・オブ・ザ・コング

監督
ジェイムズ・アーシュ



晩秋、アミューズCQNにてロードショー

かのエルヴィス・プレスリーお抱えの料理人たちに、生前のかれの奇妙な食癖を語らせる『ザ・バーガー・アンド・ザ・キング』（九六）、オーストラリアで開催された第一回ホームレス・ワールドカップに出場を果たしたニューヨークのメンバーを密着取材した『ザ・チーム』など、ドキュメンタリーの分野にヒットを連発している（と資料にある）ジェイムズ・アーシュ監督にふさわしい、入念なカメラ・ワーク、一見明快なストーリー運びがかれの劇映画第一作の魅力である。

若い水兵エルヴィス（『モーターサイクル・ダイアリーズ』で、若きチェ・ゲヴァラを好演した、ガエル・ガルシア・ベルナル）に、除隊の日が来た。降艦のとき国旗への敬礼を衛兵に促されるが「僕はもうシヴィリアンだよ」と軽くイナす。乗り込んだ長距離バスの目的地はテキサス州、コーパス・クリステイ。そこにはメキシコ人の亡き母から聞かされていた「父」がいる。

フロリダ州アパラチーから、あのニュー・オーリンズを経て、テキサス州ブラウンズビルに及ぶ全長一〇〇マイルの「湾岸・内陸水路」も南端に近い、この風光明媚なる水辺都市郊外にひろがる、美しき天然という眼福のみをお目当てに、一見に及ばれても失望なさることは、おそらくあるまい。

近くは『天国の青い蝶』で好感度一〇〇パーセントの昆虫学者を演じた、名優ウィリアム・ハート扮する父親、デヴィッド・サンダウは合衆国の現大統領のごとき「再生」を経たものか、牧師として地域の尊崇を集めている。

夜明けにバスを降りると、まず中古車を買、場末の安アパートに居を定め、ピザ配達の仕事も確保した上、日曜の朝、父の教会に車を取りつける。折から参集した善男善女に、近く名門ベイラー大学卒業予定の長男たちのロック・バンドによる、キリスト讃歌を披露するという「人生の快事」を享受していると

ころへ、好事魔多し、何の邪気も疑わせずに「最新のメンバー」として会衆に加わった制服の水兵は、二人だけになった機会を捉えて、「忘れていた過去」を思い出させるのだ。

ずっと後になってから、かれは会衆の前で「むかし金銭を伴う性的関係を、ある女性と結び、そしてエルヴィスが生まれた」と告白し、「それは私の罪であって、かれの罪ではない！」と懺悔するのだが、この場は「家族と家には近づかないでくれ」との懇願によって切抜けようとする。

「聖職者にあるまじき」卑怯な行為ではある！ しかし同じ「聖職者」のはしくれとしても、充分理解できる対処と思うのだが、ここで犯した「罪」のために、かれが受けることになる想像を絶するまでの「罰」が、以後のストーリーを形成する。あらまは……

父の懇願を無視して異母妹マレリーに近づいたエルヴィスは、彼女の寝室に出入りするまでの仲になる。これを見咎めてアパートを

訪れたマレリーの兄、つまり異母弟ポールは刺殺され屍体は水底に沈められる。やがて少女が懐妊の事実を男に告げるに及んだとき、男は祝福しつつ「二人の愛を貫くための処置」としての、ポール殺しを告白する。息子が姿を消したのは「父との教義上の意見対立による家出」と思い込む父は、この頃には、息子たちそれぞれに対する贖罪の念からか、エルヴィスを家庭に招き入れるようになり、ついに「本当の関係」を公表する、前述の場面がやって来る。

初めて「兄を殺した男と近親相姦の関係にある」ことを知った少女が、翌朝、母にすべてを打明ける光景を目撃したエルヴィスは、二人を殺し、かれらの家に火を放ち、教会に車を取りつけ牧師室に躍りこむや「懺悔して天国へ！ 崇拜と讃美の祈りを！」と挑戦するのがラスト・シーンになるが、これに続く壮絶なる父子対決の過程に、父にとって耳を覆いたくなる「事実」が暴露されるのは想像

に難くない。

公開まえの映画について、ストーリーの一部始終を述べるという愚を敢えて犯すのは、この作品の強烈なるインパクトの根源が、全く別のところに仕掛けられているからだ。というのは、かくも「明快」なるストーリーにもかかわらず、作品そのものは「分らない」とずくめ」であって、そもそも原題の『ザ・キング』とは何のことか？ 父・牧師による例の「告白・懺悔」というクライマックスに続き、若い二人が立寄ったハンバーガー・ショップで、男が折紙の王冠を造り、墮地獄の恐怖におののく少女の心中を知ってか、知らずしてか、自から戴冠するシーンが、唯一の手掛りであろうが、この行動についての「動機づけ」は全く行われていない。

そうだ！ エルヴィスの行動に、一貫して「動機づけ」が欠けていること、これが一見明快なストーリーを「分らなく」しているのであり、じつは「動機不明の破壊行動」こそ、

この作品のメインテーマだったのだ。眼光、表情、無表情……、演技力を含めた、主演男優の全身から常に発信される「破壊的要素の潜在」感によって、メインテーマは具象化され観客たちを「冷たく金しばりに」する。

ガエル・ガルシア・ベルナルなくして、この作品は企画されなかつただろう。たぶんジエームズ・ディーナなくして『理由なき反抗』（五五）が企画されなかつた、であろうように……。

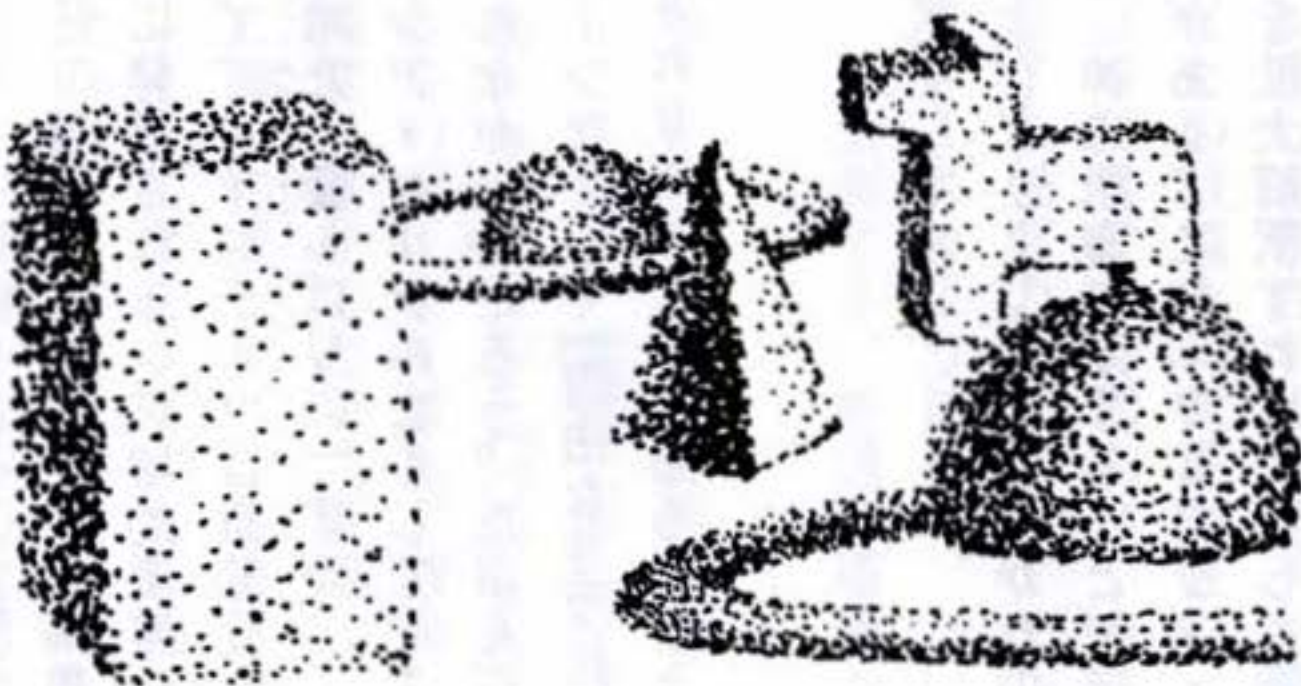
例によって蛇足を二本。

一、アダムが罪を犯してくれたお蔭で、かれの子孫たる人類は、神の恩寵に浴することができるといふ教説がある。この「フェリクス・クルパ」の論理を拡大解釈すれば、犯した罪の大きいほど、より大きな恩寵にあずかれるということになる。前記「最後の父子対決」がこのルールによって運ばれたとすれば、勝者は明らかに「子」である。「罪の王」なる

日本版のサブタイトルは、この視点から「ザ・キング」が理解されていることを示すものである。

二、ダーウィンの進化論を否定する「インテリジェント・デザイン」説を卒論のテーマに選び、同じ立場から教育委員会に高校カリキュラムの改正を要求するポールが籍を置くベイル大学は、いわゆるサザン・バプティスト系の名門として知られ、その所在地ウェイコー市も「テキサスの中心」のほかに「バプティスト達のローマ」の異名を誇る、いわゆる右派キリスト教の拠点として名高い。圧倒的支持勢力としてブッシュ政権に端倪すべからざる影響力を示すという、かれらの心根を垣間見るよすがとして、この作品を推奨することもできる。

(長野・十念寺住職)





FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●盆

〔特選〕
一億のお盆と思う大渋滞

本郷 桃児

テレビでは高速道路など、盆帰省の渋滞をしきりに報ずる。ひどい時は百キロという所もあったが、それほどでなくても国中で大渋滞が繰り返されている。「一億のお盆と思う」は全くその通りである。

〔佳作〕兄弟の下より欠けて送り盆

佐藤 雅子

盆帰省ただ母に会い友に会い

浜口 佳春

輪をはずれ見様見真似や盆踊り

伊藤寿美子

●西瓜

〔特選〕誰ならむ留守に西瓜を置きゆきしは

中島富士子

玄関にか勝手口にか西瓜が置いてくれてある。誰がくれたのだろう。親しい人の顔を一人一人思い浮かべる。外出には必ず戸締まり

をせねばという、都会の窮屈さはここにはない。ありがたい付き合いである。

〔佳作〕西瓜割る大海原を真向かいに

河合富美枝

老いし母の指の物差し西瓜切る

山口 信子

四つ割りの西瓜で足りし小句会

増田 信子

●自由題

〔特選〕山青し父の生家に母ひとり

直田 豊人

山合いの村に嫁いで夫に仕え子を育て、その子等も一人立ちした。回りには父の縁者も居ようし、古いしきたりも残っているように、母は一人で家を守っている。遠く離れ住む作者の、母への思いは深い。

〔佳作〕万緑の底に村あり夕まぐれ

目黒 祐

来年は貸さぬと決めし燕の巢

石原 新

古扇親もおおぎし風を受く

中村 真一



盆

新型の提灯並び盆用意 金谷 友江
 濁り世の闇遠ざけて盆供養 河合富美枝
 今日だけはお墓銀座の過疎の盆 工藤 浄真
 亡き母に尋ねたきこと盆用意 中嶋富士子
 踊り手を得て盆踊り最高潮 増田 信子

西瓜

よき声の西瓜売りくる今日も来る 佐藤 雅子
 目を隠し右往左往の西瓜割り 工藤 浄真
 父の忌に大きな西瓜を供えけり 金谷 友江
 叩いたり抱いたり西瓜の重き買う 石原 新
 幾重にも糸を張りたる西瓜畑 伊藤寿美子

自由題

腰低うして雀蜂より遠ざかる 金谷 友江
 氷片の六腑に沁みる広島忌 河合富美枝
 大はしやぎ老と子らとの水鉄砲 工藤 浄真
 炎天のひときは長き赤信号 中嶋富士子
 夫といて会話途絶えり梅雨じめり 佐藤 雅子
 老犬の舌だらしなき極暑かな 浜口 佳春
 水蓮や風のささやく休耕田 井村 善也
 接ぎ木せし今が盛りのトマト採る 浦田 ちゑ
 軒借りて大安吉日燕去る 山口 信子
 おも蛇のフェリーの行く手雲の峰 西井 正
 血を採られいる一身に蟬しぐれ 池田 伊吹

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

月 栗 自由題

締切・二〇〇六年九月二十日
 発表・『浄土』二〇〇六年十一月号
 選者・増田河郎子（『南風』主宰）
 応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

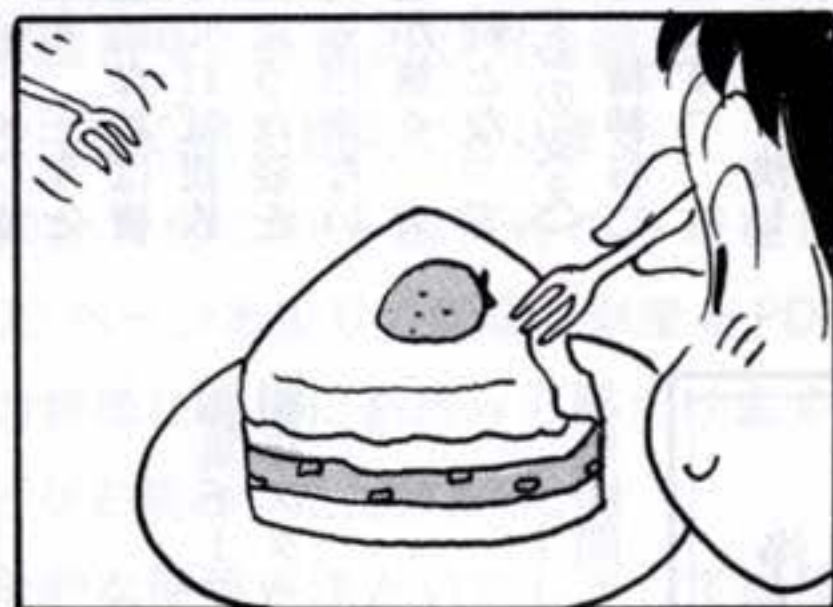
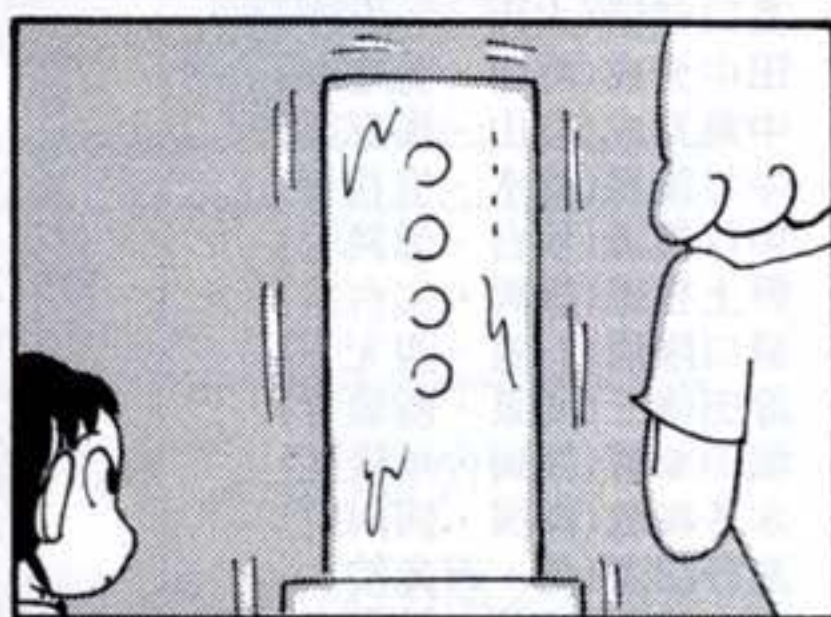
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 月刊『浄土』誌上句会係

さっちゃんね

33 かい目

かまちのよう



編集後記

建築の音にまぎれし法師蟬

岱潤

前回の小松みどりさんの話を続けよう。氏の調査では現在亡くなった方の約三割は、通夜も葬儀もせず火葬場に直送されているという。実際私も大手の葬儀社の方に聴くと、「そんなもんじやないでしょう」という。東京での実感はもつと多いということである。

故人の遺言としてそのようにしていることが一番多いようで、通夜も葬儀もせず、遺骨は散骨として海に撒いてしまうことが、ここ数年で急激に増えているという。それぞれの考えなのだから止めようがない。

その上で小谷氏は続けてこのように話

してくれた。「しかし、遺族もその方がいいと思つてしたことが、二年、三年と経つ中で、回りは彼岸やお盆になれば皆墓参りにゆく、年回が回ってくれば親族が集まつて法事をする。そのような姿を見ていると、故人のために何も出来ない自分たちの心のもつて行き場が無く、大きな喪失感に襲われる。その時となつては誰も遺族のグリーフケア（心の支え）をしてくれる人はいないので、精神科に通うしかなくなつてしまふのです」。

葬送儀礼の重要さを説くことは、決して経済的な理由ではなく、我々僧侶にとつての大事な使命なのだということを確認させられた。

(長)

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村真道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集チーフ
編集スタッフ

編集顧問

大室了皓

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十二巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十八年 八月二十日

発行 平成十八年 九月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

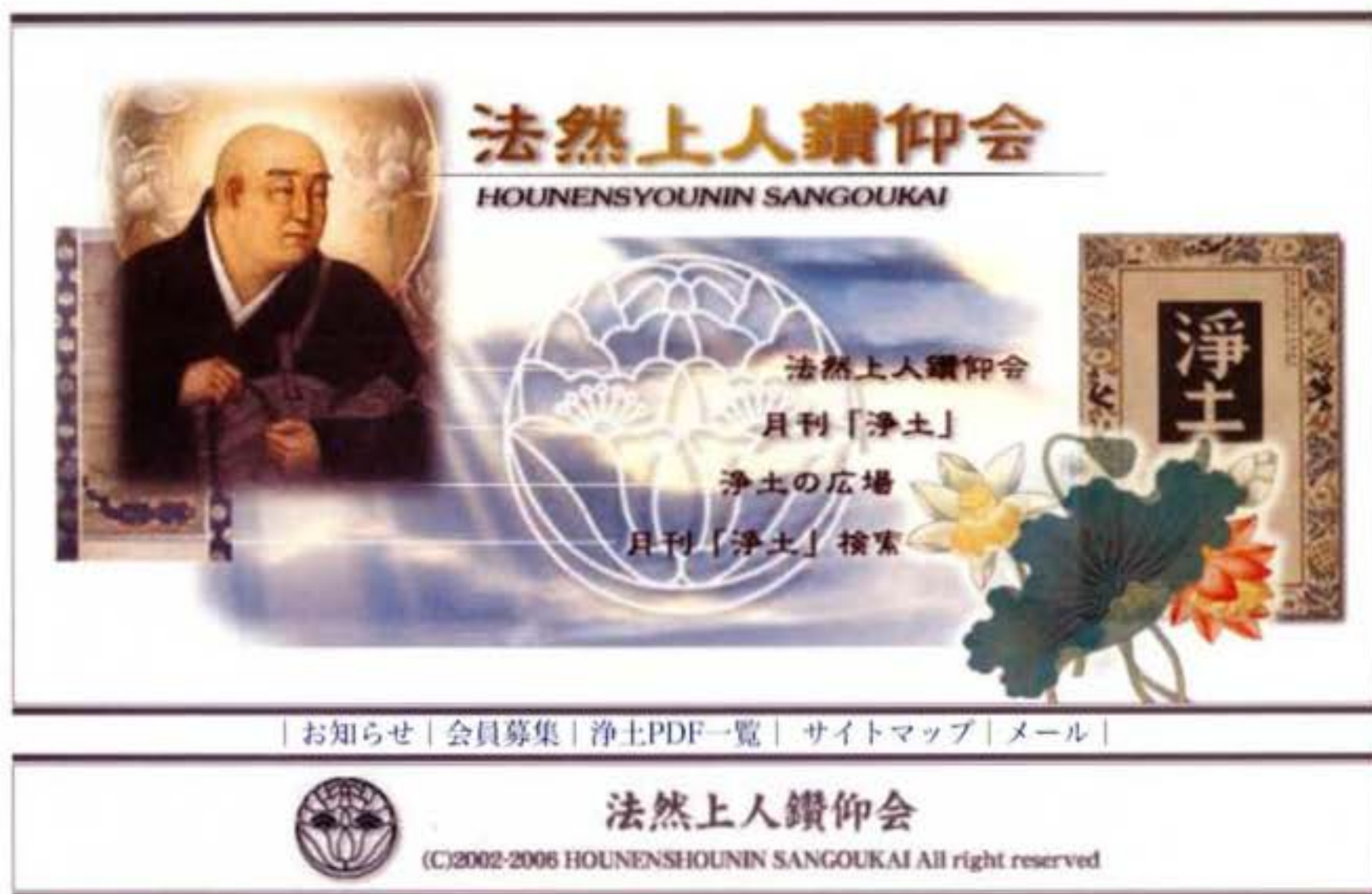
〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

月刊 浄土 800 号記念事業



法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会の機関誌月刊『浄土』は会員の皆様方のお力添えで本年の2/3 月合併号で通巻 800 号を迎えました。執筆に携わっていただいた先達善知識は 1700 名を超えております。

鑽仰会ではこれら創刊号から現在に至る月刊『浄土』800 冊以上、総 35000 ページあまりの貴重な財産を PDF 化しインターネットを通して全国の会員の皆様に自由にお読みいただけますように準備しております。現在 400 冊ほどがお読みいただけます。

効果的な使用方法といたしましては「<http://gekkan-jodo.info>」にアクセスし、月刊『浄土』検索から目次検索で氏名やタイトル名で検索し、表示された検索結果から読みたい『浄土』を選択すれば目次一覧がでてきます。そのページの表紙下部の「>>PDF」をクリックすれば PDF ファイルが表示されます。お読みいただくには PDF ビューアなどのアプリケーションが必要です。詳しくは、月刊『浄土』PDF 一覧「<http://pdf.gekkan-jodo.info>」をご覧ください。

これを機会にお近くの一人でも多くの方々に月刊『浄土』をお勧めいただき、法然上人鑽仰会の会員にご勧誘いただければ甚だ幸いに存じます。

法然上人鑽仰会スタッフ一同

法然上人鑽仰会の

本

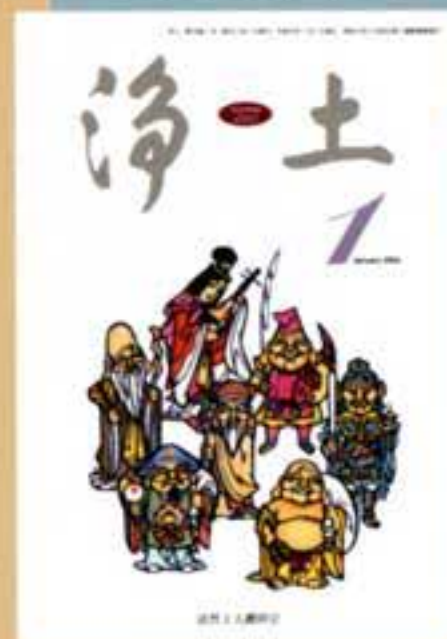


『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



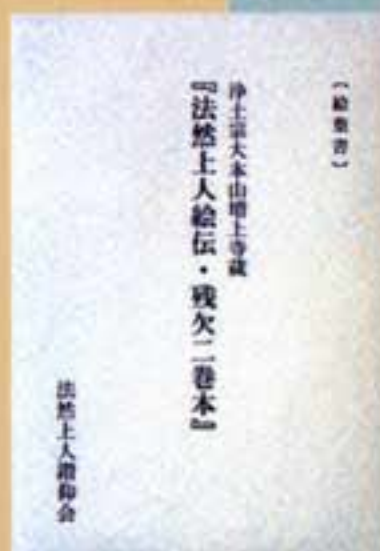
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036